

## 詩人・金子みすゞのまなざしと情感

——英米文学並行研究にみる類似性と独自性——

上 田 みどり\*

### 序

明治三十六年（1903年）山口県大津郡仙崎村に生まれた金子みすゞは、日本風土ならではの独自の情感をもちながら、西洋文学の女性作家と似た資質を作品の中に著している。彼女自身の生き様は、当時の日本の時代の犠牲者であったことをも示している。彼女の詩人としてのまなざしは、時代を超え、国を超えた普遍的性格を持つことで、現代社会に今なお注目するに値するものであり、彼女独特のまなざしは、詩を読む者に日本本来の豊かな精神性を気づかせる。

この拙論においては、みすゞが愛読したと言われる、同時代のイタリア系英女性詩人 Christine Georgiana Rossetti（1830–94）の詩と、同時代の英女性作家 Emily Jane Bronte（1818–48）のそれぞれの作品や時代性を検証比較し、異文化間における、みすゞの作品の独自性と類似性を探ろうとするものである。

### 1. 金子みすゞの生い立ちと師

金子みすゞは本名テルと言ひ、二歳年上の兄がいた。1905年には弟が生まれている。母の妹の嫁ぎ先である上山文英堂書店の支店長として清に渡る父親について、みすゞも清に渡る。ところが、父親がみすゞ（テル）三歳の時死去し、金子家は仙崎で金子文英堂書店を営むことになる。テルは7歳になり、瀬戸崎尋常小学校に入学し、13歳で群立大津口頭女学校に入学。校友誌『ミサヲ』にその頃すでに詩を発表している<sup>(1)</sup>。

みすゞの成長段階で彼女の詩情を育んだのは、西條八十の存在が大きい。彼女は西條と何度出会ったのか定かではないが、手紙のやりとりを頻繁に繰り返した。

---

\* 広島経済大学経済学部教授

彼女が師と仰いだ西條八十（1892-1970）は1918年鈴木三重吉と、童話童謡雑誌『赤い鳥』を創刊した。1923年20歳になったテルは、「みすゞ」のペンネームで、童謡を書き、そのような雑誌に投稿を始める。雑誌『童話』に〈お魚〉〈打出の小槌〉、『婦人倶楽部』に〈芝居小屋〉、『婦人画報』に〈おとむらい〉『金の星』〈八百屋のお鳩〉が一斉に掲載となり、『童話』誌上で西條八十に認められる。西條は彼女を「若い童謡詩人の中の巨星」と言い、みすゞは投稿詩人たちの憧れの星となる<sup>(2)</sup>。

西條自身は早稲田大学英文学部の予科を飛び出し、兜町に身をやつし、その頃謡った「唄を忘れたかなりや」の末尾の節に、

唄を忘れたかなりやは  
象牙の船に、銀の櫂、  
月夜の海に浮べれば  
忘れた歌を想ひだす。

という個所がある。西條自身が書いた自伝の解釈によると、この詩はいつか自分が運命の手により、象牙の船にのせられ、銀の櫂をそえて静かな月夜の海に浮かべさせられるというような、適処適材の位置に置かれれば、忘れ去った昔の歌をもう一度想いだし、美しい声で歌うようになるかも知れないという自身の期待<sup>(3)</sup>を詩に盛り込んでいると想像される。

このような時代の西條八十を、詩の本道に導き入れたのが、漱石門下でネオロマンティズムの小説家鈴木三重吉だった。そのような西條の心情を写したかのようなみすゞの詩作の環境がそこにあった。みすゞにとって、時代は厳しいものであり彼女の才能を認め評価し激励してくれたのが、西條であった。それはみすゞの傑作「大漁」に見られるように、みすゞの詩には、西條が指摘する「あっと思わせるようなイマジネーションの飛躍がある」からであろうし、時代の風が必ずしも追い風ではない者にとって、辛い厳しいものでありながらもみすゞがそれに抗して生き抜こうとする逞しい精神力を持ち、かすかであっても希望を持ち続ける明珠でもあったからではないだろうか。西條が自作の詩の意義を、「自分の歌を吟んだ人々の心にはみどりの微風のような、あるなつかしい郷愁をもたらすであろう。それがレーズンデートルだ<sup>(4)</sup>」と言い切るように、みすゞのうたにもその存在価値が見て取れる。

## 2. 救いの求め方

みすゞ生誕約50年前、イギリス女性文学者エミリー・ブロンテ [Emily Bronte

(1818-48)も若くして、30歳で亡くなっている。彼女の代表作『嵐が丘』[*Wuthering Heights* (1847)]には、男女の壮絶な愛の物語として我々が読む時、キリスト教文化の示す厳しさとみすゞの作品の示す、もっと穏やかな世界という明確な違いが見える。

『嵐が丘』では、拾い児 Heathcliff が嵐が丘で育てられる。養父の死後、その息子に虐待され、その妹の Catherine を熱烈に愛すが、彼女は他の地主と婚約する。Heathcliff はその家を出る。3年後富を得て嵐が丘に帰ってくるが、その時にはすでに Catherine は結婚していた。それ以後 Heathcliff は Catherine 自身というよりもその家への復讐に燃える。Heathcliff は Catherine の結婚相手の妹、Isabella を誘惑し、妻にし、虐待する。Catherine の死後、彼女の墓をあばこうとするほど彼女を忘れられない。今や、Heathcliff は養父の息子を屈服させ、その子もひどく虐待し、Catherine の遺児で同名の女の子を、自分の子どもと無理に結婚させ、彼は両家の支配をする。結局彼の息子は病弱で死亡するが、養父の家の虐待した孫と、この Catherine の娘とが、愛し合うようになり、二人は幸福になる。<sup>(5)</sup>これが物語りの粗筋である。

上記のように Catherine と Heathcliff は、天国から地獄まで、互いに捜し歩き求め合い、あの世まで行くが、復讐半ばにしてプラトニックラブで死別する。すさまじい愛の物語である。物語最後に行き着く何世代をも待つまで、ここには愛する男女の間に、救いが見られない。そのようなブロンテの代表作と比較して、男女間の愛を考える時、みすゞの結婚生活は、愛に満ちたものとは言えない。彼女の母方の弟に対する気持ちに男女の感情が見え隠れする。師弟間においても西條に対する敬愛の念がみられ、それがみすゞの詩作を喚起するに際して大きな影響を与えたことは確かであろう。男女間の友情は認められても、素直に表現することは認められない時代である。その上みすゞの夫は遊び人であり、病気まで移されたことは確かであり、ましてや彼女の文学的価値を認めるような人物ではなかった。一番身近であるはずの者からの協力支援はあるはずもなかった。だからこそ詩を描くことはみすゞにとって唯一の内的発露であり自らへの精神のいやしでもあった。

同時代の歌人に、柳原白蓮という人物がいる。彼女はみすゞとは相対する生き方をしている。彼女は大正10年、みすゞが18歳の時にあたる1921年、夫の不義に絶縁状をたたき付け離婚し、自らは命がけの愛を貫き通したことで、当時の世間を騒がせた。白蓮が81歳で亡くなるまで貧しいながらも幸せな結婚生活を送ったことは、みすゞの結婚生活とは対照的である。

みすゞの夫に対する抵抗はもっとおだやかである。彼女が師と仰いだ西條が下関

に出向いた機に、会うこともならず、みすゞの感情の発露は自然な成り行きとして、詩という形に表現されることであつたろう。特に男性優位の社会であつた時代に、女性が文学することはみだらなもの、人間を墮落させるものとして世間は忌み嫌つた。そんな環境下であるにもかかわらず、なお、みすゞの詩には救いや感謝のまなざしが見られる。彼女の一生そのものがすさまじい、むしろ悲惨とも言える人生であるにもかかわらず、と言うよりも、そうだからこそ、彼女の作品の中に「おかげ」や「思いやり」が滲んでいることに気づく。その例をいくつか取りあげてみたい。

みすゞが生まれた大正時代仙崎通村は漁師町で、父親も船の仕事をしていた。そのような環境下でイマジネーションの飛躍が師の西條を驚かせ、読者に洞察力の深さであつと言わせた「大漁」という歌を解釈してみたい。

朝焼け小焼けだ	Red skies, sunrise.
大漁だ、	Big catch !
大羽鰯の	Big catch of
大漁だ。	Herring !
浜は祭りの	Up on the beach
ようだけど、	it's a carnival, but down in the sea
海のなかでは、	they'll mourn
何万の	For thousands on thousands of
鰯のとむらい	herrings. <sup>(6)</sup>
するだろう。	

育った環境のせいでもあろうが、みすゞは、魚や生き物が登場する場面を多く捉えている。とくに鰯は漁師町では極当たり前の日常の中にあつた。他に「お魚」「鯨法会」といううたもあるが、その共通のテーマは‘命’である。人間は、魚でも植物でも、それぞれが大切にしている命を、貰って生きなければ生きることができない動物であることの‘業’を持っている。人間にしか魂はないと考えるる西欧キリスト教文化とは、そこに一線を画したものがある。

みすゞのまた別の作品「日の光」の中では、自然の恵みの平等性をさらに広げた形でうたわれている。

おてんと様のお使いが	The Sun's messengers
------------	----------------------

そろって空をたちました。	Together climbed the sky.
みちで出会ったみなみ風、	South Wind met them on the way
(何しに、どこへ。)とききました	And asked, "Where to and why?"
ひとりは答えていました、	One answered,
(この「明るさ」を地にまくの、	"I cast light on earth
みんながお仕事できるよう。	So everyone can work."
ひとりはさもさもうれしそう。	One, pleased as punch,
(わたしはお花をさかせるの、	"I make flowers bloom
世界をたのしくするために。)	So the world's a happy place."
ひとりはやさしく、おとなしく、	One, sweet and gentle,
(わたしはきよいたましいの、	"I hang the bridge
のぼるそり橋かけるのよ。)	The pure in spirit cross."
のこったひとりはさみしそう。	The last, looking friendless,
(わたしは「かげ」をつくるため、	"Oh, I just tag along
やっぱり一しょにまいます。)	To throw some shadows." <sup>(7)</sup>

この詩の中には、日の光が「みんなが仕事ができるように、超自然がみんなに降りてくること」を示している。太陽の明かりは平等に分け隔てなく、デモクラティックに営まれる。神を明るさとすれば、すべて現世の営みを助けてくれる。助けてもらう力はあまねくみんなに与えられるのだとみすゞは歌う。このみすゞの発想は仏教思想に由来するものだと考えがちであるが、アメリカ文学者・哲学者であるエマーソン [Ralph Waldo Emerson (1803–82)] の超越主義 (Transcendentalism)<sup>(8)</sup> にその考え方は見られ、さらにそれ以前の Pantheism<sup>(9)</sup>に通ずるものでもある。

### 3. 個 の 認 識

また「蜂と神様」においても、みすゞは蜂から花へ、そして庭、土塀、町、日本、世界、神様という風にグローバルに循環していく視点を持っている。その循環の中でそれぞれが誰かの、あるいは何かのおかげで生きていることへの慈悲や感謝をみすゞは忘れていない。

この「蜂と神様」における時代の先見性も見て取れる。つまり日本では、自分の所属する大きなところから始まって、自分の存在は最後にくるのが通例である。しかしみすゞの詩は発想が逆になる。個の発想がすでに出ている。みすゞがキリスト教を学んでいたわけでもないだろうが、キリスト教社会の個から始まる発想に類似

するものとも捉えられる。みすゞの突出した個の認識は次の詩が呼応する。

私と小鳥と鈴と 私が両手をひろげても、 お空はちっとも飛べないが、 飛べる小鳥は私のように、 地面を速くは走れない。	Me, a Songbird, and a Bell Spread my arms though I may I'll never fly up in the sky. Songbirds fly but they can't run Fast on the ground like I do.
私がからだをゆすっても、 きれいな音はでないけど、 あの鳴る鈴は私のように たくさんな唄は知らないよ。	Shake myself though I may No pretty sound comes out. Bells jingle but they don't know Lots of songs like I do.
鈴と、小鳥と、それから私、 みんなちがって、みんないい。	Bell, songbird, and me All different, all just right. <sup>(30)</sup>

この詩は画一的傾向にある日本の教育一般に一石を投じた。詩が示す通りに動いたかどうかはさておき、個性を大事にしようとする教育現場が多い。今だからこそ、この詩が重要視されるようになった。しかしその現実はさておき、みすゞのこの詩は、みすゞの物事を相対的に見る鑑識眼を鋭く写し出している。みすゞが選ぶ用語は、自分、鈴という美しい音色のもの、そして小鳥という美しい声を出すものという、聴覚からくる気持ちのよいものを比較する。自分と比較する際の身近で確かな存在を選ぶ。そして最後にみんなちがってみんないいと結ぶから子どもらにも自然に納得されるのである。大人はそうはいかない現実を持つ。世の中そうは動いていないからこそ大人にも世に訴えかけようとする力を与える。他国の宗教を認めるわけでもなく、風習がちがっているための争い事も耐えない現実がある。

#### 4. みすゞの愛読したロゼッティ

西條八十が『童話』誌上で、「どこかふっくりとした温かい情味が謡全体を包んでいるこの感じはちょうどあのクリスティナ・ロゼッティ女史のそれと同じだ。<sup>(11)</sup>…」と述べている。クリスティナ・ロゼッティ（1830-94）はロンドン生まれの英女流詩人であり、その中でも最も秀でた一人であると言われている。

みすゞはこのロゼッティを愛読したと言われる。ロゼッティの作品の中でも *The*

*Germ* 中の ‘The Dream’ は叙情詩で有名だが、中でも *Goblin Market* (1862) のその奇抜な空想や軽快な筆致感情の温かみは、みすゞの作品との類似性が高いように思われる。<sup>(12)</sup>

ロゼッティの感覚の繊細さと美しさはみすゞと通じるものがあり、特に1863年世に認められた「怪物市場及び其の他の詩」では、地上の生活の享楽という誘惑に対する人間の葛藤を示しながらも、洗練された用語を使用し分かりやすく描写している。

また、ロゼッティの詩集の中の子守歌のなかで、‘重いものは何’ (WHAT ARE Heavy? SEA-SAND AND SORROW) という短い詩がある。

重いものは何、濱邊の砂と悲しみよ

MS: 32 What 〈 〉 heavy? Sea sand and

短いものは何、今日と明日よ

MS: [What are deep? The ocean and truth:]

はかないものは何、春の花と人の若さよ

What are frail? Spring blossoms

深いものは何、大海と真理よ。<sup>(13)</sup>

and youth:<sup>(14)</sup>

この詩はロゼッティがいつ歌ったものか定かではない。しかし彼女は15歳頃から次第に健康を失い、この世を「死のかげの谷」と観したこともあることを考慮にいと、人間の無常とはかなさを共に受け入れ、それを見つめる哲学的醒めた目があることは、みすゞのまなざしにも共通するところであるように思う。

## 5. 結 論

みすゞの死は早かった。そしてどうしてもその人生から悲哀を感じないではおれない。人間を「万物の霊長」として考えた多くの西洋文学に示されるように、多くの生きるものの頂点に座しながらも、人間の不完全さ未熟さを冷徹に描く英米文学作品をみすゞが知識として得ていたとは考えられない。しかし人間の生老病死を認め、命の尊厳を厳粛ながらも温かく認識させるのがみすゞの功績の一つと見ることが出来る。あらゆる生きるものと共に生き、癒しをもらうことのおかげをみすゞは教える。その詩に表わされる姿勢は明かるく活き活きとする。

それではなぜみすゞは死を選んだのかという問いに、私たちはふとためらう。彼

女の死は眠りの中にあり、そこに絶対神に対峙する人間の有り様よりも、むしろ仏に帰依する安らぎを求めていたのであろうと想像する。みすゞは命あるものと共に生きることを、共に喜び悲しみ感謝した。彼女の悲劇的人生は、ジェンダー学のステレオタイプの犠牲とも言えるが、1930年というまだグローバルな視点を持たない世に生まれながらも、時代に先駆け、個々の命の尊厳を原点とした発想のもとに、短命の一生を精一杯駆け抜けた。その思いを詩に託し作品を生み出した、日本固有のしかしグローバルな視点も兼ね備えた女流詩人だと言える。

### 注

- (1) 矢崎節男『金子みすゞ ころの宇宙』（ニュートンプレス、1999、2000）p. 156
- (2) *ibid.*, p. 157
- (3) 西條八十『西條八十 唄の自叙伝』（日本図書センター、1997）pp. 19-21
- (4) *ibid.*, p. 208
- (5) 『英米文学辞典』（研究社、1937、1985）p. 1506 参照
- (6) *KANEKO MISUZU SONGS FOR CHILDREN Something Nice* translated by D.P. Dutcher (JULA 出版局、1999) p. 80
- (7) *ibid.*, p. 96
- (8) Emerson によれば、人間は自然の一部であり、自然は神の意志の反映である。従って人間は神性をうけているゆえ、なるべく自然に近い生活をして、内部に有する神性を発達させれば、完全の域に達しうる、というのが彼の Transcendentalism の出発点であり、中心点であり、矛盾の多い彼の説のうち、終始一貫した主張となっている。*Ibid.*, p. 386
- (9) 汎神論。万有神教、万有神論などとも訳す。神を絶対的超越者とせず、宇宙または世界に内在するとみる立場。有限的な存在である個体も、無限な普遍的な神をそれ自体のうちにもつという。すでに新プラトン派をはじめ、近代においては Spinoza などにみられるが、哲学のみならず芸術においても、イギリスのロマン派、ことに Wordsworth, Shelley, またはアメリカの Emerson などにこの傾向がある。*Ibid.*, p. 994
- (10) *KANEKO MISUZU SONGS For CHILDREN Something Nice* translated by D.P. Dutcher (JULA 出版局、1999) p. 10
- (11) 西條八十『西條八十』pp. 155-156
- (12) 『英米文学辞典』（研究社）p. 1146 参照
- (13) 『クリスティナ・ロセッティ詩集』中村千代訳（開隆堂 大正15年）p. 184
- (14) [Date of composition unknown. Editions: 1872, 1872a, 1893, 1904. The notebook MS is in the British Library.]  
The Complete Poems of CHRISTINA ROSSETTI A Variorum Edition Volume II  
Edited, with Textual Notes and Introductions by R.W. CRUMP, (Louisiana State University Press, Baton Rouge & London) p. 346